

魔法少女リリカルなのは
はVivid★キルゼム
オール

@。

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

魔法の国のプリンセス、田中ぶにえです！女王になるために、ミットチルダで一年間修行することになりました！ミットチルダを我が手中に収めるため、頑張ります★！

※この小説は魔法少女魔法少女リリカルなのはVividと大魔法峠のクロスオーバー小説です。原作に合わせるために、ぶにえを高校生から中学生にしています。

ヴィヴィオやアインハルトたちの関節がありえない方向に曲がるかもしれませんのでご注意ください！

目次

第0話 田中ぶにえちゃんミットチルダ

に登場！の巻 ————— 1

第1話 聖王と霸王と肉体言語の巻

4

第0話 田中ぷにえちやんミットチルダに登場!の巻

ここはミットチルダからも地球からも遠い遠いとある世界。

そこはミットチルダとは少し違う味の魔法に満ちた世界。

色鮮やかなお菓子で作られているかのような建物の数々。道には猫や犬のような車が走り、空には帽子を被った気球、魚のような飛行機、しまいにはカマキリが飛んでいる。

その世界の中心、女王エスメラルダの住む宮殿で一人の男が泣いていた。横に佇むのは妻、女王エスメラルダ。そして目の前にはこの男がこの世で最も愛する娘、ぷにえが立っていた。すすり泣く男の傍で女王は静かに言葉を発する

「ぷにえ、よく聞くなさい。あなたは今日から一年間地上で暮らすのです。様々な困難がきつと待ち構えているでしょう。しかし、あなたはそれに打ち勝たねばなりません。なぜなら」

「うおおおっううっううううぷにえええ寂しくなったらいつでも「あなたは少し黙ってください」はい。」

「大丈夫よ。パパ。だって女王になるための試練だもん★」

「ふふふ。一年後、あなたの成長した姿を楽しみにしていますよ。」

心配する父をよそに微笑ましげに娘の旅立ちを見送る瞳は慈愛に満ちている。そしてエスメラルダは最後の一言を口にする。

「人間界の修行兼、来るべきミットチルダ侵略作戦へ向けての潜入捜査、任せましたよ。」

「任せてママ!一年後ミットチルダの名前をこの世の地図から消して見せるわ!」

「その意気ですぶにえ。あなたなら立派に任務を遂行できるでしょう。さあ!いきなさいぶにえ!」

「はい!田中ぶにえ!行って参ります!」

そうしてぶにえは元氣よく人間界へ飛び立った。

これは、魔法の国のプリンセス田中ぶにえと、一人の少女が王になるまでのリリカルマジカルキルゼムオールな物語である。

S t. ヒルデ魔法学院中等部

「天空の聖魔法王国から転校してきた田中ぶにえでーす!よろしくね★」

「うおおおおおー！！」「ぶにえちやん！」「こっち向いてー！」

ぶにえの容姿は美少女の多いSt. ヒルデ魔法学院の中でも群を抜いていた。

その外見に思春期真っ盛りの中学生男児が飛びつくのは無理もないことである。

「中等部にとんでもなく可愛い娘が転校してきた」とぶにえの噂はすぐに広まった。

ぶにえ曰く「チャームの魔法を使っただけよ。女の子なら誰でも使えるわ」だそうなの。

そしてその噂は中等部に留まらず、ヴィヴィ才達の通う初等部まで届いていた。

少し字が余ってしまいました！初めまして@。です！次回から本格的にヴィヴィオ

達と絡ませていきたいと思えます！

そして覆面アインハルトちゃんも。!?次回もよろしくお願ひします！

第1話 聖王と霸王と肉体言語の巻

「いつてきまーす！」

初めまして！私、高町ヴィヴィオ、10歳です。ミットチルダ在住で魔法学院初等科に通っています。

今日は4年生の始業式！ワクワクしながら登校中です。

「おはよー！ヴィヴィオ！」「ごきげんよう、ヴィヴィオちゃん」

「リオ、コロナおはよー！」

元気にあいさつしてくれたこの二人は私の親友、リオ・ウエズリーとコロナ・ティミル。

コロナとは一年生の頃からの大親友で、リオとは去年の学期末に出会ったんだけど、もう既に親友なのです。

「クラス分け聞いているー？」「うん！」「3人一緒のクラスだよね！」『イエーイ！』
久しぶりに会う親友たちと和気藹々していると。

「あの一・・ちよつといいかな？」

「!?はい、!?どうかしまふいたか!?」

囁んじやいました。不意に声をかけられたつてもあるんだけど、それだけじゃないんです。

とつても、綺麗な人だったんです。透き通る様なブロンドの髪はちよつと長めのポブカット、個性的な目を中心にデザインされた赤いカチューシャ、少し大きな瞳で鼻筋の通った顔。凜として、気品のある声。歳は私たちより先輩かな。

そんな声の主に私達3人は見とれてしまいました。

「大聖堂を探しているんだけど、どこか分かるかな? 今日転入してきたばかりで迷っちゃって」

「転入されたんですかー! 私の名前は高町ヴィヴィオ。初等科の4年生です! 大聖堂には私達も今から一緒に行くところなので、よかつたら一緒に行きませんか?」

「あら、ありがとう。ヴィヴィオちゃんね。申し遅れてごめんなさい。私は田中ぶにえ、中等部一年生よ。でもこの学校に通うのであればあなた達のほうが私より先輩なのかしら? よかつたわ。この学校広いからどこに行けばいいのかわからなくて。」

「ご一緒させて頂くわ。」

「いえいえ! 先輩だなんてそんな! 迷いますよねこの学校、; 道案内、任せて下さい

！」

それが私とぶにえさんとの初めての出会いでした。それから間もなく「中等部にめちやくちや可愛い子が転入してきた」という噂が私たち初等部にまで届いてきたのは言うまでもありません。

それから私たちはぶにえさんの世界の話を聞いたり、私たちの世界の話をしたりしながら大聖堂へ向かいました。

そうしているとあつという間に着いちやつて

「それじゃ、中等部は向こうの方だから私は行くね。道案内ありがとう。ヴィヴィオちゃん。コロナちゃん。リオちゃん。また会ったらお話ししましょう。」そう言っつてぶにえさんは中等部の集合場所へ歩いていきました。

「綺麗な人だったねー・・・」

「うんうん！それになんていうかお姉さんって感じでほわほわしちやいました」

「だよねだよね！ノーヴェとはまた違う感じがしたよね！」

「ノーヴェさんって今日紹介してくれるって言う・・・」

「そうそう！私とコロナのコーチなの！」

「うわあ楽しみだなあ・・・」

そんなやり取りをしながら始業式にを終え、ノーヴェにリオを紹介して、

ママ達から私の初めての相棒「クリスマス」プレゼントして貰って、
フェイトママに大人モードを披露できて、とつても楽しい一日でした。

ぶにえさん・・・また会えるといいな・・・

「・・・ファーストコンタクトは成功ね」

始業式を終えた後、この世界の事を知るべく図書館へ赴いた帰り道

私はそう呟いた。日はとつくに落ちていく。この手の情報収集は下僕にやらせたい
ところだが、いかんせん私の下僕は予想以上に役立たずであった。

仕方なく本当に仕方なく自分で調べてみたところ・・・チンプンカンプンであった・・・
我ながら情けない。

そのせいでこんな遅い時間までかかってしまった・・・

今朝、ヴィヴィオ達に声を掛けたのは偶然ではない。

時空管理局。今後ミットチルダに攻め入る際、必ず障害となる組織。

数多くの魔導士を保有し、その名の通り時空を管理している巨大な組織だ。

母エスメラルダも、もちろんこの管理局の動きには目を光らせている。

正確に言えば、その中のごく一部の職員なのだが・・・

実は時空管理局の魔導士のほとんどは、とるに足らない存在である。

時空管理局の職員の数は確かに脅威だ。戦場では数というものはそれだけで力だ。

しかし、母が警戒する人物達はそれをも覆しかねないのである。

そして警戒する人物の一人が、高町なのは一等空尉

そう。今朝接触した高町ヴィヴィオの保護者である。

ある程度時空管理局の下調べは済んでいた。とはいっても、一般市民が得られる程度の情報だが。

そもそも私がそうそう道に迷うなど・・・いや少し迷っていた・・・

予想以上に学園は広かった・・・

まあそれはさておき、とにかく接触に成功し、少しだが、この世界の話聞くこともできた。

この世界での魔法を使った格闘技などは特に興味深い。
そう考えながら、ぷにえハウスへ帰るべく足を進めていると、

「ストライクアーツ有段者ノーヴェ・ナカジマとお見受けします。」

面白そうなやり取りが聞こえてきた。